帰国生の大学進学実績

	2022年度		2023年度		2024年度		2025年度	
	合格	進学	合格	進学	合格	進学	合格	進学
東京大学	0	0	0	0	1	1	0	0
慶應義塾大学	4	3	1	1	1	1	0	0
早稲田大学	7	3	3	1	2	1	4	2
上智大学	11	7	8	5	4	3	10	5
東京理科大学	1	1	0	0	1	1	3	1
国際基督教大学	2	1	1	1	0	0	2	0
明治大学	1	1	0	0	3	1	0	0
青山学院大学	6	2	2	0	3	1	2	0
立教大学	1	0	5	3	2	1	3	1
中央大学	3	0	2	0	2	1	3	1
法政大学	0	0	3	1	0	0	1	0
成蹊大学	6	6	4	4	4	4	7	6
その他	東北大学(総合型)／ 明治薬科大学／ 日本獣医生命科学大学／ 杏林大学／日本体育大学／ 多摩美術大学		University Collage／ New York University／ 北海道大学(水産)／ 千葉大学(理)／ 日本医科大学(医)／ 同志社大学(文化情報)		Newcastle University／ 京都大学／順天堂大学(医)／ 杏林大学(医)／日本医科大学(医)／ 星薬科大学／麻布大学(獣)／ 桜美林大学(航空)／ 芝浦工業大学(建築)		東京科学大学/都立大学/千葉大学/ 順天堂大学(医)/杏林大学(医)/ 日本大学(医)/学習院大学/ 明治学院大学/東京農業大学/ 関西学院大学/武蔵大学/ 國學院大學	

※成蹊中学・高等学校へ帰国生として入学・編入した生徒と、中高在学中に保護者の海外転勤に帯同し海外の学校を経験した生徒を含みます。
※成蹊小学校の国際学級出身者は含みません。
※海外の大学に進学する場合、いったん日本の大学に入学することがあり、ここではその両方を表示しています。

SEIKEI 成蹊中学・高等学校

https://www.seikei.ac.jp/jsh/

〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-10-13

TEL：0422-37-3818　FAX：0422-37-3863　E-mail：chuko@jim.seikei.ac.jp

Webサイトから、
学校案内の
デジタルパンフレットが
ご覧いただけます。

2025.04.1,000

SEIKEI
For Returnees

帰国生のみなさんへ

SEIKEI JUNIOR HIGH SCHOOL / SEIKEI SENIOR HIGH SCHOOL

帰国生と保護者の皆様へ

校長 **仙田 直人** SENDA Naoto

成蹊中学・高等学校は、小学校から大学までが揃う成蹊学園の一角にあり、その自然に恵まれた緑豊かな環境は、海外の学校を彷彿させるキャンパスとなっています。帰国生の受け入れについては、約90年近く前から実施しており、1964年からは全国に先駆けて、帰国生対象の国際学級も設置しました。

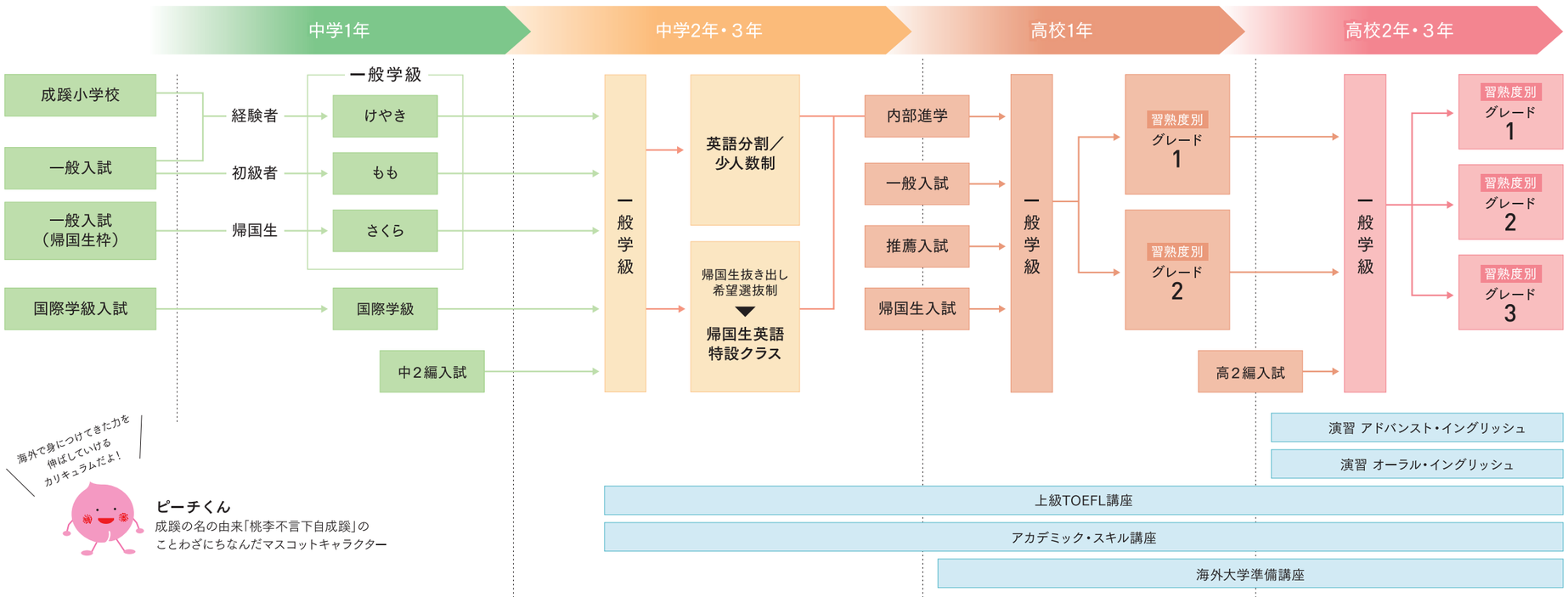
また、国際理解教育の面では、多くの生徒が世界各地の学校と提携したプログラムで留学に向かうとともに、交換プログラムなどによる留学生も常時迎え入れています。このように成蹊はグローバル教育が日常的に行われており、帰国生にとって、過ごしやすい学習環境で個性や能力を伸ばすことができる学校です。是非とも本校の教育を理解し、入学していただけることを心から期待しております。

帰国生受け入れの歴史

成蹊中学校では1964年に国際特別学級（1995年に国際学級と改称）を設置し、以来、帰国生を受け入れてきました。設置後しばらくの間は、帰国生指導専門の教員による指導が行われてきましたが、その後、一般学級を指導していた多くの教員も国際学級を担当することで、学校全体が帰国生指導の経験を積み重ねてきました。国際学級は、当初現地校出身者と日本人学校出身者を区別せずに受け入れていましたが、日本と異なる教育環境で育った帰国生の受け入れに特化するために、現地校またはインターナショナル校出身者のみのクラスに再編して現在に至ります。

現在では国際学級は1年間で修了し、中学2年生からは一般クラスへ移って学校生活を続けます（英語のみ別クラス）。また、中学2年生編入試、高校帰国生入試、高校2年生編入試でも帰国生を受け入れています。

中高6ヵ年の英語教育の流れ



INTERNATIONAL CLASS

国際学級 （中学1年のみ）

国際学級の英語授業

世界中のさまざまな国や地域で生活していた生徒たちで構成される国際学級は、日本とは違った文化や現地での経験から、幅広い視野や積極性、伸びやかな発想を兼ね備えた学級です。各々の貴重な経験を生かし、互いに教え合い、学び合います。

英語の授業は週5時間です。そのうち3時間がネイティブ教員の授業、2時間が日本人教員の授業です。授業はAll Englishで行われます。ストーリーを通して、語彙や表現、リーディングスキルなどを養います。読んだものをもとにディスカッションを行い、互いの意見や価値観を共有します。また、発表活動を通して、プレゼンテーション力を高めるなど、英語力を維持し、さらに伸長させるために、さまざまな活動を行います。また、ジャーナル（英語日誌）の課題を通してライティング力、文法力を身につけます。

国際学級（H組）の生徒たち（2024年度）

Message from Student and Teacher

私は4歳から12歳までの8年間外国で暮らしてきたので、帰国後、日本の学校に通うことに不安を感じていました。しかし、私と同様に海外の生活が長いH組のメンバーとは気持ちを共有できることが多く、入学後すぐに打ち解けることができました。少人数クラスなので男女問わず仲良く、お互いを尊重しています。留学生や国際学級の先輩との交流など、縦と横のつながりが多いことも特徴です。英語が日常的に飛び交い、生活していた世界の様々な国の経験について語りあうこともあり、お互いを深く知れば知るほど家族のような絆ができていきました。クラスのモットーは“happy family”で、その絆は体育祭、夏の学校や蹊祭などの学校行事を通じてさらに深まりました。
また、クラスが少人数なので、授業中に先生へ質問する時間を多くとることができます。自分の疑問点もその場で解決でき、また友人の質問で新たな気づきもあるのでより理解が深まります。私はH組の先生やメンバーと過ごす時間が大好きです。みんな学業とそれぞれの部活動で忙しくも、とても充実した学校生活を送っています。

国際学級　Hさんから

HさんとA.F Brough先生

“Unividual.” That is our class motto. At least I hope it will be. We haven’t made the final choice but it is the one I like the best. The students explained it to me as a combination of “unique” and “individual.” And that pretty much describes the IH class this year, and come to think of it, it pretty much describes all the six IH classes that I have looked after. Fifteen or so boys and girls, who are Japanese, but are not Japanese. All getting used to life in a Japanese school with their classmates, while sharing their rich life experiences with each other and their non-returnee friends from other classes. In this short space given to me, I was going to describe IH as a family, and more than just a class, but perhaps I should borrow from my very smart class and just say that we are one very Unividual Family !!

国際学級（1年H組）担任
A.F Brough 先生より

ACADEMIC ADVISOR

アカデミック・アドバイザー

海外で学ぶための学習支援

本校には、各種留学プログラム参加者や海外大学志望者を支援するアカデミック・アドバイザー専任の教員であるMatthew Wright先生がおり、海外で学ぶための準備講座を開講する他、個人指導としては出願校の選択、学習計画、エッセイ等出願書類作成等のサポートを行っています。

海外で学ぶための準備講座
海外プログラムの参加者や海外大学志望者のための特別講座

アカデミック・スキル講座
留学プログラムの前に、英語で授業を受けるスキルをつけるための講座

上級TOEFL®講座
海外大学等に応募する際に必要とされるTOEFL®でハイスコアを狙うための講座

海外大学準備講座
米国大学の学科試験であるSATの準備講座

上級TOEFL® 講座

Message from Teacher

Matthew Wright先生

My role as the Academic Advisor is to provide academic and personal support to any and all students involved in international education, whether that takes the form of strengthening their English abilities, recommending study abroad programs, assisting in applying to foreign universities, or preparing them for Eiken/international programs at Japanese universities. With a background in studying the U.S. higher education system, I apply that knowledge and experience to offer TOEFL, SAT, and pre-study abroad classes after school to any interested students. These opportunities are open to students in both the junior and senior high schools, and allow them to either acquire the skills and preparation for their higher education path needs or to further improve their English. Outside of classes, students can sign up for a one-on-one appointment to talk about any school-, English-, or international-related topic they have.

アカデミック・アドバイザー
Matthew Wright 先生より

海外大学準備講座

多彩な海外留学プログラム

私はエクセター校のサマースクールに現地で5週間、また、チョート校のサマースクールにコロナ禍によりオンラインで6週間、奨学金を頂いて参加させてもらいました。エクセター校では、ハークネス・メソッドと呼ばれる、十数人程度の生徒が教師と共に丸いテーブルを囲んでディスカッションを通して学ぶ授業を受けました。事前に資料を読み込んで、意見を発言し、他人の意見を聞いて話し合います。教師はほとんど口を挟まないため、積極的に行動する力が育まれます。様々な国の生徒達との寮生活は刺激が多く、週末のイベントも交流を深める良い機会となりました。チョート校ではオンラインでしたが、数多くある選択肢の中から授業を自由に選ぶことができました。大量の宿題は大変でしたが、世界中の同じような興味をもつ高校生と過ごした時間は貴重なものでした。このような素晴らしい経験をさせてくださった成蹊の先生方に感謝しています。

サマースクールに参加したKさんから

Message from Student

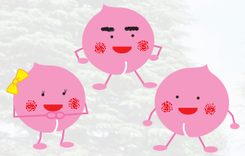
Kさん

※最新のプログラムについては、本校ウェブサイトをご確認ください。

卒業生が語る

成蹊の魅力

**久しぶりの国際学級の教室で、
当時を振り返りながら、
成蹊の学びについて語ってくれました。**



成蹊中学校の国際学級を選んだ理由は？

Tさん： 祖母が成蹊の家庭科主催の料理イベントに参加していて、この学校を気に入っていたのがきっかけでした。国際学級は1年間だけなので、まず日本の生活に馴染んでから、一般学級に移行できます。中2で30人以上のクラスに入ったときにとまどったので、最初からじゃなくてよかったと思いました。

Yさん： 私の場合は、両親が情報を集めてくれたいくつかの学校を訪問して、その中で自然環境と活気のある成蹊の雰囲気に惹かれました。現地校とインター校からの生徒を受け入れているので、自分達と同じ経験をしてきた人と一緒に共感し合いながら過ごせると思いました。

Nさん： パリでは英語についていくのだけで必死で、塾に行くとか、受験勉強に手をつける余裕がありませんでした。だから、自分が成蹊に合格できるとは思いませんでした。
私は、学校訪問の際に、出会った生徒や先生方と波長が合って、「ここだ！」と思いました。特に記憶に残っているのは、国語の入試問題で、塾でやるような問題ではなくて、自分を引き出してくれるような作文の問題があって、自分を見てくれていると感じられました。

国際学級だから得られたものは？

T： 同じような価値観を持った人と、少人数で過ごしたことで、一生ものの友人ができたことです。

Y： 私も、今でもつながりが消えていません。高校へ行っても、大学生になっても、「あ、誕生日だな」と、ふとしたときに連絡しています。たった1年ですが、共通の価値観があって、それでいて多様な人間関係というか…。自分自身を客観視できる場だったのが国際学級でした。海外で全く違う環境に放り込まれてなかなか自分を出せなかった私が、日本に帰って少しずつ心を開いていくことができる場でもあったと思います。

N： 公立小学校にいたときは帰国生という一色で見られていましたが、国際学級では、英語圏出身や、英語圏以外の人、英語に対するコンプレックスのある人たち、いろいろな帰国生が集まっています。また、クラスのみんなと日本の学校のルールにぶつかりながら、自分のできること、できないことを知ることができたのがよかったです。

帰国生に期待されるものは？

T： 帰国生とひとくくりにされるのはすごくいやです。

N・Y： そう、そう。

T： よく、帰国生と言うと、まず自信があって、英語がすごくできて、さらに他にも何かできると思われます。

N： 帰国生だから、英語はペラペラで、なおかつフランスにいたからフランス語もよく話せると期待されます。自分はそこまでではないので、他の帰国生でよく話せる子と比較されて、「なんでできないの？」と言われてしまうこともありました。

Y： 中2になって一般クラスに入ったとき、なかなか友だちを作るのには苦労しました。そんなとき、帰国生英語特設クラスで、国際学級ではない英語のできる人達と交流したとき、自分のわだかまりが解けたような感じがしました。

N： 帰国生英語特設クラスは、今の自分にも影響しています。英語教材を通して社会や政治を考え、劇を演じ、プレゼンし、英語を使ってアウトプットすることが多かったので、今の自分の力になっています。

T： 英語のディベートのように、英語を使って、グループでも、個人でも考えるという経験は、すごく身になっていて忘れられないです。

左：Yさん
上智大学 総合グローバル学部 3年
Nさんの双子の妹。

中：Nさん
慶応義塾大学 法学部 3年
Yさんの双子の姉。

姉妹でロンドンの幼稚園に3年、その後小2まで日本に帰国、小2の途中から小6までパリのインター校に在学。

右：Tさん
早稲田大学 国際教養学部 4年
ロンドンに小3から中学入学までの3年間現地校に在学。

※進学先の学年は取材時のものです。

成蹊は自分の海外経験を生かしてくれた？

Y： パリの小学校では、児童自らの発信で、例えば、車を作ってみようとか、教室に火星を作ってみようとか、自由にいろいろな教材・課題で授業をしていました。成蹊に入学してからも、自分達がやりたいことをサポートしてくださる先生がたくさんいらして、環境も整っていて、パリの学校で身についたスタイルを失わないでいられたことにすごく感謝しています。それと、思っていても、なかなか行動に移せないものですが、ぽろっと言ったことを、「いいね」と背中を押してくれる仲間の存在も大きかったです。

T： 私が思うに、成蹊は帰国生英語特設クラスの授業とか、英語を伸ばす環境があって、海外で身についたものを大切にできる学校です。その一方で、とても日本的な学校だとも思っています。国際学級の中では、帰国生としてのつながりもあるのですが、学校の中では日本人として扱ってもらえました。帰国生のままでよければ、海外の学校にいてもよいわけです。海外の経験をもつ帰国生でありながら、日本のこともよく理解できるように育んでくださったと思います。

N： 私も大学生になって、いろいろなタイプの帰国生と出会ったのですが、その中で私はけっこう日本のことがわかっていて、日本の社会のルールに適応できているのだと気づきました。それは、成蹊では帰国生だからって特別扱いせず、日本の常識やスタイルを、海外で得たものを失わずに身につけられたからだと思います。

T： いきなり30人のクラスに入っても、時間をかければ日本のスタイルを身につけられると思いますが、その代わり、海外で身につけたものは消えてしまいます。だから、国際学級の1年ってとても大事だったと思います。2つの文化を理解した人になれると思います。

今の自分自身に生かされているものは？

T： すごく選択肢が増えた気がします。大学は国際系の学部にいて、中高と続けていた柔道を、大学の体育会でも続けていて、国際的な視点と日本的な視点その両方の世界に所属できる柔軟性が身についたと思います。

N： 私は、法学部にいますが、多文化コミュニケーションとか、社会学に近い分野に興味があって。あとは映画制作をしています。妹にプロデューサーになってもらい、高校時代からの映画作りの仲間と映画を撮り終えたところです。海外にいたころ、言葉の壁もあって伝えるとか、表現するのが苦手で、代わりに書くこと、物語を作ることに興味をもつようになりました。同じ帰国生でもストレートにものが言える人が多くて、あなたの話はまどろっこしいと指摘されました。そして自分にぴったりな、伝える、表現する方法は何かと探したとき、それが映画でした。

Y： 上智大学の総合グローバル学部で、国際関係、NGO、アジア研究などをしています。あと、未就学児の国際ボランティアをしています。姉と映画を制作する他に、これも高校でチャレンジしたことなのですが、一人で弾き語りをしています。おかげで、自分がどう見られているか、どう見せるかということを考えられるようになりました。

成蹊から未来につなぐ

T： 海外で得た価値観と、日本での生活で得た価値観、2つを持ったことで、いろいろ選択肢が増えたと思います。そのたびに、自分でどれにするか決断することや考える機会も増えて、中学に入学したときと高校を卒業したときではずいぶん違う人間に成長できたと思います。いろいろな人たちとの出会いがあって、見えてくるものもいろいろあり、それが大学を選ぶきっかけとなり、将来やりたいことにつながりました。中高一貫で受験がないので、6年かけていろいろトライして成功体験を重ねていけました。海外にいたときに比べ、身長でも、言語でも劣等感の強かった自分より、今は「自信の塊」みたいに感じられます。性格が明るくもなりました。

N・Y： すごーい。

N： 私も、そこまで自信はないですけれど、とても共感ができます。私の場合は、自分の考えや思いをアウトプットする映画とか、文章と出会えたのは、中高の6年間でした。帰国生だけれど、日本語の作文が上手いというのが自分の強みで、毎年、作文選集に掲載されたいと頑張って、その成功体験が自分の自信につながったと思います。大学のAO入試でも、自分をちゃんと見つめられて書くことができたというのは大きいです。

Y： 私は、そこまで劣等感はなく、深く考えてこなかったかと思います。私は、人が面白いです。国際学級にいて、いろいろな人がいていいのだということがわかり、さらに一般クラスに進学して、どんどん世界が広がって、人と接するのが好きになっていきました。殻が破れたというか、自信がついたと思います。

N： 自分に自信をつけるのもそうだし、自分が関わることで、その人に自信をつけるきっかけを与えたこともあって。多様な人たちが影響し合っているところが成蹊の良さです。

受験生のみなさんへ

Y： 受験は大変ですが、成蹊にはサポートしてくださる人がたくさんいます。自分が自信を持てるようになったので、受験生のみんなも頑張ってほしいです。やってみたいことがないという人もいると思うけれど、ちょっとやってみたいということはあると思います。それを行動に移せる環境が成蹊にはあると思います。

N： 私が受験生で学校を見て回ったときに、文化祭でも勉強でも熱意をもって一生懸命やっている学校が成蹊でした。勉強も大事ですけれど、成蹊は自分の好きなことができる場所だと思いました。気になることをやってみようと行動に至るまでのプロセスを作ってもらえたと思います。

T： たしかに、チャンスを与えてくれる学校だと思います。あと、一人で決められる人が多い気がします。誰かに流されるのではなくて、自分がやりたいことだからといって決める人が多いです。中学で生徒会をやったのもそうでした。生徒会は日本の中高でしか経験できないことだと思ってトライしました。その後、高校では生徒会に立候補はしませんでしたが、自分が何をやって、何をやらないかを決めるとき、中学で生徒会を経験したことに意味がありました。

Y： 「一度、やってみよう」という経験はしやすい学校です。何事にもトライしやすいです。

T： 学校を選ぶには、自分に合う合わないがあると思います。入学したときと卒業するときで、自分は大きく変わりました。今だけを見ないで、自分が何をしたいのか、どうしたいのか未来を考えて選んでほしいと思います。